姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第96集

姫路城城下町跡

―姫路城跡第407次発掘調査報告書―

2020

姫路市教育委員会

序

姫路城は本市の象徴であるとともに、日本が誇る世界遺産の一つです。江戸時代のはじめに池田輝政によって五重六階、地下一階の大天守をはじめとする建造物群が築かれて以来、400年を経た現在もその威容を誇っています。

姫路城下町は、姫山･鷺山を中心に螺旋状に巡らされた三重の堀によって、天守をはじめ城の中核施設が置かれた内曲輪、武家屋敷が立ち並んだ中曲輪、町人地･寺社を中心とした外曲輪に区分されます。このうち内曲輪と中曲輪の大半は世界遺産及び国の特別史跡として登録･指定され、保護･顕彰が図られています。

一方、外曲輪は近代以後、姫路の経済の中心地として発展し、現在も播磨地域の中核都市に相応しいまちづくりが進められています。このたび、北条口四丁目において、集合住宅建設に伴い発掘調査を行いました。調査地一帯は、外曲輪南東部の町人地及び武家屋敷地に該当します。ここに発掘調査成果を報告し、姫路城跡の調査･研究の進展に資する所存であります。

最後に発掘調査の実施にあたり、多大なご協力を賜りました関係者各位に心から御礼申し上げます。

令和2年(2020年)3月31日
姫路市教育委員会
教育長　松田　克彦

例言・凡例

1. 本書は姫路市北条口四丁目37番で実施した姫路城跡第407次発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、集合住宅建設に先立って実施した。
3. 現地調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが行った。
4. 調査区平面図の作成に際しては世界測地系を使用し、本書で使用する方位は全て座標北である。また、標高は東京湾平均海水準(T.P.)を基準とした。
5. 土層名は、『新版標準土色帳』(1999年度版)に準拠した。
6. 本書で使用する遺構番号は、通し番号を付し、遺構種略号を前につけた。遺構番号は、調査時に使用したものを基本的に踏襲している。遺構種略号は次のように呼称する。
   SK:土坑、SE:井戸、SD:溝、SA:柵
7. 本書に関わる遺物・写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。
8. 本書の執筆は、関・山下が分担して行った。執筆分担は目次に記した。また瓦に関する所見は全て山下が担当した。
9. 遺物の年代観等の記載については以下の文献を参考にした。
   白神典之1992「堺擂鉢考」『東洋陶磁』第19号　東洋陶磁学会
   中川　猛2012「焙烙考-姫路と周辺の焙烙について-」『山口大学考古学論集　中村友博先生退任記念論文集』中村友博先生退任記念事業会
   乗岡　実2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡　表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会

現地調査から整理作業までの体制

姫路市教育委員会
- 教育長　松田克彦
- 教育次長　名村哲哉（平成30年度）
- 　坂田基秀（令和元年度）

生涯学習部
- 部長　岡田俊勝（平成30年度）
- 　沖塩宏明（令和元年度）

文化財課
- 課長　花幡和宏
- 課長補佐　大谷輝彦
- 技術主任　関　梓（令和元年度）
- 技師　黒田祐介（平成30年度）

埋蔵文化財センター
- 館長　前田光則
- 課長補佐　岡﨑政俊
- 係長　森　恒裕
- 技術主任　小柴治子
- 　中川　猛
- 　福井　優
- 　南　憲和
- 　関　梓（平成30年度）（調査担当）
- 技師　黒田祐介（令和元年度）
- 技師補　山下大輝

目　次

本文目次
第1章 調査に至る経緯と経過(山下)
　第1節 調査に至る経緯 …… 1
　第2節 調査の経過 …… 1
第2章 遺跡の立地と環境(山下) …… 1
第3章 調査成果(関)
　第1節 基本層序 …… 1
　第2節 第1面の遺構 …… 2
　第3節 第2面の遺構 …… 3
第4章 総括(山下) …… 5

図目次
図1 2SD1と374次-2SD02の位置図 …… 6
図2 調査地位置図 …… 7
図3 調査区東壁断面図 …… 8
図4 第1面平面図 …… 9
図5 石列1・2 平・立面図 …… 10
図6 第1面遺構 平・断面図 …… 11
図7 SE1・2 平・立面図 …… 12
図8 第2面平面図 …… 13
図9 第2面遺構 平・断面図① …… 14
図10 第2面遺構 平・断面図② …… 15
図11 第2面遺構 平・断面図③ …… 16
図12 遺物実測図① …… 17
図13 遺物実測図② …… 18
図14 遺物実測図③ …… 19
写真図版

第1章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

兵庫県姫路市北条口四丁目37番において集合住宅建設が計画された。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡（県遺跡番号：020169）に該当しているため、文化財保護法第93条第1項に基づき平成30年（2018年）8月31日に姫路市教育委員会宛に届出がなされた。これを受けて、文化財課が工事内容の精査、事業者との調整を行い、工事に先立ち事業地内の埋蔵文化財の保存状況等を確認するために確認調査を実施することになった。平成30年10月19日に敷地内の3箇所において確認調査（調査番号：20180269、姫路城跡第401次調査）を実施し、古代・中世・近世の遺構が良好に残っていることを確認した。確認調査成果に基づき、工事により遺構面が影響を受ける373㎡を対象として、記録保存を図るため本発掘調査（調査番号：20180376、姫路城跡第407次調査）を実施することとし、平成30年12月7日に姫路市と事業者間で委託契約を締結した。

第２節　調査の経過

本発掘調査は、敷地内に残土置場を確保するため、分割して実施した。平成31年1月8日に調査を開始した。確認調査の成果に基づき、基本的に近世整地層上面を第1面、地山上面を第2面として調査した。調査はバックホウで盛土・造成土等を除去した後、人力で遺構検出、遺構発掘を行い、適宜、記録写真撮影及び遺構実測を行った。3月2日には現地説明会を開催し、41人の見学者が来場した。3月26日に現地作業を全て終了した。現地調査終了後、姫路市埋蔵文化財センターにおいて出土品整理等を実施し、本発掘調査報告書の刊行をもって事業を完了した。

第2章　遺跡の立地と環境

姫路城城下町跡は、姫路市域を南北に流れる市川と夢前川によって形成された沖積平野のほぼ中央に立地する。姫路平野には東西交通の要である山陽道が古代より通る。東は丹波・有馬方面、西は美作・因幡方面に通じる。また南の海上には瀬戸内海航路があるなど陸海の交通の要衝であった。こうした地理的要因を背景として近世姫路城は成立した。池田輝政により、慶長6年（1601）から8年をかけて築城された姫路城は、平野部と独立丘陵である姫山・鷺山を利用した平山城である。市川の支流である船場川を西限とし、三重の堀によって内曲輪、中曲輪、外曲輪と縄張りされる（図2）。

調査地は、外曲輪南東部に所在する。調査地周辺の道路の多くは絵図に描写されており、近世段階から踏襲されていることがわかる。調査地は、町屋と武家屋敷地に跨っており、東半部の武家屋敷地については絵図から占有者が判明する。第一次榊原氏時代（1649～1667）の『姫路御城廻侍屋鋪新絵図』によると、調査地は「関十右衛門」の屋敷にあたる。第二次松平氏時代（1667～1682）では「岡田四兵衛」「木屋庄兵衛」の屋敷にあたる。第二次本多氏時代（1682～1704）の『播州飾東郡国衙庄姫路図』では「伊藤治衛門」の屋敷地とある。第二次榊原氏時代の『播州姫路御城城下之図』（1711）では町屋敷地となっているが住人の名は記されていない。酒井氏時代中期（1816年）には「太田津右衛門」、文化3年（1806）の絵図では「早部小伝次」の屋敷にあたる。

また姫路城中曲輪南東部に位置する現在の姫路郵便局・イーグレ姫路の一帯には本町遺跡がある。本町遺跡では1980～1981年に発掘調査が行われ、Ⅰ期（7世紀末～8世紀前半）、Ⅱ期（8世紀後半～9世紀前半）、Ⅲ期（9世紀後半～11世紀）、Ⅳ期（12世紀～13世紀初頭）に分類できる遺構・遺物が検出された（姫路市教委1984・姫路市2010）。このうちⅠ・Ⅱ期に比定される遺構としては、掘立柱建物跡5棟や塀跡などが挙げられる。遺構主軸方位は、Ⅰ期のものが概ねN21°Eを差す一方、Ⅱ期の遺構は概ね真北方向を差す。また周辺遺構からはいわゆる播磨国府系瓦が出土している。これらの考古学的成果や歴史地理学の知見から本町遺跡が播磨国府比定地だとする可能性が指摘されている（姫路市教委1984）。近年、姫路城城下町跡（338次・389次・399次・411次調査等）、豆腐町遺跡でも古代の遺構・遺物が検出されており（兵庫県教委2007・2011・2019）、播磨国府及びその関連施設の解明に近づいている。

第3章　調査成果

第１節　基本層序

基本層序は、調査区西壁の土層断面観察（図3）によれば現代盛土、近現代整地層を経た標高13.3～13.4mで江戸時代後期の遺構面（第1面）に至る。また標高13.0～13.1mで地山を確認し、江戸時代以前の遺構を検出した（第2面）。

今回の調査で検出した遺構は、石列、土坑、井戸、溝、柱穴列、柱穴などである。以下では主な遺構についてその概要を記述する。

第２節　第1面の遺構

石列1（図4･5）

調査区中央部に位置し、南北方向に延びる。検出部の総延長は約10mを測るが、石列の中央部分は近代以降の撹乱を受けており、石材が失われている。石列北側は良好に残存しているが、南側は数石のみの検出にとどまった。石列主軸の方位はN19.5°Eであり、飾磨郡条里の方位と概ね一致する。石列に使用されている石材は、径20cm程度の河原石が中心である。一部では石が2段積まれている箇所を確認することができる。

最南端の石列東側で土師器皿がまとまって出土した(図12-2～9)。いずれも口径約10㎝、器高約2㎝を測り、底部に糸切り痕跡が明瞭に残る。また石列1中央部の1段目の石を除去し、2段目の検出時に関西系焼締陶器擂鉢(図12-1)が出土した。口径29.8㎝･器高10.8㎝を測る。遺物の年代観は、口縁部の形態から概ね18世紀前半と考えられる。

石列2（図4･5）

調査区中央、石列1から東に約1.5mのところに位置する。調査区南側でしか確認できず、北側については後年の撹乱を受けたものと考えられる。検出面での規模は、延長2.4mを測り、石列1と概ね平行する。使用されている石材は径20cm程の河原石で、2列に並び、最大3段積みで構成されている。

SD1（図4）

調査区中央部に位置する。東西1.5m･南北10m･深さ0.5mを測る。第1面では南側は大きな撹乱や土坑により不明瞭であった。当初、南北方向に延びる溝と想定して調査を進めたが、埋土の土質や堆積状況などから南北に長い楕円形の土坑であることが判明した。前述の石列1･2は、SD1が埋没したのちに構築されている。

埋土からは、多量の陶磁器とともに軒丸瓦(図12-10･11)･軒平瓦(図12-12)が出土した。**10**の瓦当文様は、外区内縁部に素弁様の文様がみられる。素弁文であることを是認するならば、24弁確認することができる。内区は左巻き三巴文である。笵傷などはみられない。瓦当裏面下半縁には縁に沿ってナデが施される。丸瓦凸面部は縦方向のヘラナデが確認できる。この瓦当文様は、本町遺跡･姫路城城下町跡でこれまでに9点出土している(姫路市教委1984、兵庫県立歴史博物館1985、姫路市教委2003･2018b)。**11**の瓦当文様は、左巻き三巴文である。瓦当裏面には横方向のナデが施される。丸瓦凸面部は縦方向のヘラナデが確認できる。丸瓦凹面部には鉄線切り痕跡(コビキB)が認められる。**12**は、瓦当文様のほとんどが残っていないため、文様の全容は不明である。また瓦当接合部については、平瓦部の一部を切除した後、カキメを施し顎部となる粘土を貼り付ける、いわゆる顎貼り付け技法である。

SD5（図4）

調査区西部で検出した南北方向の溝である。検出面での規模は、延長12.2m、幅0.5～0.9m、深さ約0.3mを測る。遺構の方位はN21°Eを測る。SE2より北側ラインは不明瞭であり、下面に位置する2SD1の埋没過程における最終段階である可能性が高い。

SK26（図4･6）

調査区中央南部に位置する。検出面での規模は、東西1.6m、南北0.88m以上、深さ0.46mを測る。埋土からは多量の陶磁器･炭化物などが出土したことから、廃棄土坑と考えられる。土師質火消壺(図12-14)、とその蓋(図12-13)を図示する。**14**は口径18㎝、底径21cm、器高22.4㎝を測る。内外面ともにナデ調整を施し、内面底部全体には煤が付着していた。**13**は口径21.8㎝、器高3.2㎝を測る。内外面ともにナデ調整が施される。外面には取手を付けるためのカキメを施している。内面には火を受けて赤色化した痕跡が確認できる。

SK105（図4）

調査区南西部に位置する。検出面での規模は、東西0.9～1.4m、南北3.6m、深さ0.32mを測る。掘方は不定方形を呈する。SK106を切り込む。埋土上層からは、焙烙(図12-15)が出土した。口径24㎝、器高10㎝を測る。外面下部にはタタキ痕跡が明瞭に確認できるが、ヨコナデによりタタキ痕跡が部分的に消失する。中川A2類に分類できる。また下層からは、土師器甕(図12-16･17)、須恵器杯(図12-18)が出土した。**16**は、甕の把手である。外面にはハケメが施される。**17**は甕の口縁である。口縁端部内面にはハケメ痕跡が残るが、内面はナデ調整が施される。外面にはハケメが残る。**18**は、口径が9.8㎝、器高3.2㎝を測る。内外面ともにナデ調整を施す。上層は江戸時代の遺構であるが、下層からの遺物はいずれも古代のものであり、上層とは異なる遺構に帰属するものが混入したと考えられる。

SK107（図4･6）

調査区中央南部に位置する。検出面での規模は、径2.38m、深さ0.48mを測る。掘方は略円形を呈する。周辺には同規模の土坑が複数切り合う。埋土からは陶磁器や瓦、炭化物の他、貝類が多量に出土した。出土遺物

は埋土を上層と下層に分層し、取り上げた。上層からは焙烙(図13-19)と軒丸瓦(図13-20・21)が出土した。**19**は、口径33cm、器高7.6cmを測る。中川H類に分類でき、19世紀頃のものと考えられる。**20**の瓦当文様は、外区内縁に素弁様の文様がみられる。内区は左巻き三巴文である。**10**と同笵の可能性が高く、さらに**20**にのみ笵傷が確認できる。瓦当裏面には斜め方向のナデがみられ、先述の**10**と共通する。また瓦当接合部丸瓦先端にはカキメ痕跡とみられる凹凸が確認できる。**21**の瓦当文様は、左巻き三巴文である。殊文は12個配される。瓦当裏面は不定方向のナデを施した後、瓦当裏面下半縁に沿ったナデを施す。また瓦当接合部には、カキメ痕跡が認められる。下層からは中心飾に宝珠文を配する均整唐草文軒桟瓦(図13-22)が出土した。中心飾りの宝珠文の最上部には三葉状のモチーフが確認できる。顎端面後縁部に面取りが確認できる。

SK148（図4・6）

調査区中央南部で検出した遺構である。東部及び南部は撹乱を受け欠失している。検出面での規模は、東西1.7m以上、南北1.1m以上、深さ0.62mを測る。埋土からは焙烙(図13-23)が出土した。**23**は、口径24.4cm、器高9.0cmを測る。外面下半部には平行タタキの痕跡が明瞭に残る。上部はヨコナデによりナデ消され、下部とは一線を画す。この特徴から中川A3類に分類できる。

SK151（図4・6）

調査区中央部で検出した。検出面での規模は、東西0.9m以上、南北1.7m以上、深さ0.4mを測る。遺構の西部・南部は別の遺構によって切り込まれる。埋土からは、立葵文軒平瓦(図13-24)が出土した。顎端面後縁部には面取りを施すが、その他の面取りはない。

SE1（図4・7）

調査区中央西部で検出した。検出面での規模は、掘方直径1.68m、石組内径0.8m、深さ2.74mを測る。径10cm程度の河原石を使用した石組みの井戸である。

SE2（図4・7）

調査区中央西部、SE01の北東で検出した。径10cmの円形の河原石を使用した石組みの井戸である。検出面での規模は、掘方直径1.9m、石組内径0.64m、深さ2.18mを測る。上層部の石組は、後世の掘り込みによって破壊されていた。

SE3（図4）

調査区中央西部で検出した。検出面での規模は、径1.9m、深さ1.12mを測る。掘方は円形を呈する。石組みを確認することはできず、転落したとみられる石材も検出できなかった。しかし先述したSE1・2と近距離に位置することや遺構の規模・形状から勘案して井戸である可能性が高いと評価した。

第３節　第2面の遺構

2SD1（図8・9）

調査区西部で検出した南北方向の溝である。検出面での規模は、延長約20m、幅2.3～2.7m、深さ約0.8mを測る。遺構の主軸の方位は、N21°Eであり、飾磨郡における条里地割と一致する。上面には先に述べたSD5 が位置する。

遺物は、備前焼の擂鉢(図13-25・26)が上層から出土した。遺物の年代観は、口縁部形状および擂目の特徴から17世紀第2四半期～第3四半期が下限になると考えられる。さらに土師器皿(図13-27)、天目碗(図13-28)、焙烙(図13-29)、備前焼擂鉢(図13-30)、火鉢の脚部(図13-31)が下層から出土した。**27**は、口径13.4cm、器高2.75cmを測る。体部から口縁部にかけてやや外反する。底部は指オサエの痕跡が確認できる。なお、外面には「せん□(太カ)ん／くわこん.／□い□」との墨書が確認できる。形状から17世紀前期頃のものと考えられる。**28**は、口径11.8cm・器高5.8cmを測る。**29**は口径19.8cmを測る。外面に格子目タタキ痕跡が確認できる。中川A1類に分類できる。17世紀初頭頃のものと考えられる。**30**は、口縁部形状と螺旋状擂目の特徴から17世紀第1四半期頃のものと考えられる。これらの出土遺物の年代観によれば2SD1は、近世城下町形成以前から機能していた可能性があり、近世城下町形成後の比較的早い段階で埋没したと考えられる。

2SD4（図8・9）

調査区西部で検出した北西から南東に延びる溝と当初想定していたが、南北に長い楕円形の土坑である。上層にはSD1が位置する。検出面での規模は、延長8.2m、幅3.0m、深さ0.28mを測る。遺構の主軸の方位はN34°Wである。埋土からは土師器高杯(図13-32)が出土した。

2SD7（図8・9）

調査区西部、2SD4の北側で検出した北西から南東に延びる溝と当初想定していたが、南北方向に長い楕円

形の土坑である。上層にはSD1が位置する。検出面での規模は、延長12.5m、幅0.94～1.18m、深さ0.24～0.32mを測る。

2SA1（図8・9）

調査区中央部で検出した南北方向の柱穴列である。検出面での規模は、延長6.78mを測る。直径約0.2mの柱穴が約1.7～1.8m間隔で並ぶため、柵である可能性がある。遺構の主軸方位は、N19.5°Eであり、飾磨郡における条里地割と概ね一致する。柱穴から時期を特定できる遺物は出土していないが、西側に位置する2SD1 の埋没後に設けられたものであり、第1面の石列1はこの柱穴列が廃絶後に構築されたものであると考えられる。

2SK27（図8）

2SD1 の西側で検出した。2SK105を切り込む。検出面での規模は、東西0.5m、南北0.7mを測る。埋土から備前焼擂鉢(図13-33)が出土した。口径26.8cm、器高8.7cmを測る。口縁部形状と螺旋状擂目を有する特徴から17世紀第1四半期ごろのものと考えられる。

2SK32（図8・10）

調査区東部で検出した。検出面での規模は、南北2.38m・東西2.48m・深さ0.32mを測る。掘方は不定方形から不定楕円形を呈する。破片ではあるが、陶磁器類、瓦、焙烙などが多量に出土した。

2SK33（図8・10）

調査区東部で検出した。検出面での規模は、南北1.76m・東西2.4m以上・深さ0.38mを測る。掘方は不定楕円形を呈する。破片であるが、陶磁器類が多量に出土した。

2SK44（図8・10）

調査区南東部で検出した。検出面での規模は、東西2.28m、南北0.7m、深さ0.38mを測る。埋土上層からは、備前焼擂鉢(図14-34)、肥前系陶器大皿(図14-35)、焙烙(図14-36)、軒平瓦(図14-37)、下層からは土師器皿(図14-38～40)、土師器壺(図14-41)、焙烙(図14-42・43)が出土した。**34**は口径25.3cm、器高9.1cmを測る。口縁部形状と螺旋状擂目を有する特徴から17世紀第1四半期頃のものと考えられる。**35**は口径26.6cm、器高8.05cmを測る。**36**は口径31.7cmを測る。中川A2類に分類できる。**37**は青海波様の文様が確認できる。時期は判然としない。**38～40**は口径7.15～9.9cmを測る。いずれも底部には糸切り痕跡が明瞭に残る。**42・43**は、中川E類に分類できる。18世紀頃のものと考えられる。

2SK45（図8・10）

調査区南東部に位置する。検出面での規模は、東西1.48m、南北1.78m、深さ0.48mを測る。埋土からは近世の陶磁器類とともに古代のものとみられる平瓦(図13-44)が出土した。格子目叩き板の痕跡が確認できる。

2SK47（図8・11）

調査区中央部に位置する。検出面での規模は南北2.3m・東西1.0m以上・深さ0.3mを測る。掘方は長方形を呈すると考えられる。

2SK49（図8・11）

調査区中央東寄りに位置する。検出面での規模は、東西1.14m、南北1.64m、深さ0.26mを測る。掘方は楕円形を呈する。埋土からは土師器壺(図14-45)が出土した。内外面ともにナデ調整であり、底部には糸切りの痕跡が残る。

2SK50（図8・11）

調査区南東部に位置する。検出面での規模は、東西0.88m、南北1.4m以上、深さ0.3mを測る。掘方底部には、多量の炭化物が層状に堆積していた。なお炭化物の上部は、均質な土で埋め戻されていた。

炭化物層からは、陶器風炉(図14-46)・焙烙(図14-47)・関西系焼締陶器擂鉢(図14-48)が出土した。**47**は口径28.3cm・器高5.8cmを測る。中川E類もしくはH類に分類できる。18世紀から19世紀初頭頃のものと考えられる。**48**は口径28.9cm、器高10.8cmを測る。

2SK105（図8・11）

調査区北部に位置する。2SK27に切り込まれる。検出面での規模は、南北2.5m・東西2.7m、深さ0.3～0.4mを測る。埋土からは須恵器杯(図14-49・50)・須恵器平瓶(図14-51)・須恵器壺(図14-52)が出土した。**49**は口径9.6cm・器高2.95cmを測る。内外面にロクロ回転ナデが施される。**50**は口径12.4cm・器高3.8cmを測る。内外面ともにロクロ回転ナデが確認できる。**51**は平瓶の口縁部である。口径7.45cmを測る。**52**は短頸壺の口縁部である。口径12.0cmを測る。この遺構からの出土遺物は、土師器と須恵器のみであり、それらの年代観から古代の遺構である可能性が高い。

第４章　総括

今回の調査における成果として、①武家屋敷地と町人地を区画する屋敷境と考えられる石列･柱穴列･溝を確認することができたこと、②下層では、古代の遺構･遺物を検出したこと、が挙げられる。以下では、これらの成果に基づいて若干の考察を述べることとする。

① 武家屋敷地に関する遺構

酒井氏時代(1816年)に描かれた絵図『姫路侍屋敷図』に記された地割や屋敷割を現在の地形図上に重ね合わせ、往時の城下町を推定復元した『城郭図』(図2)によると、調査区に該当する部分に屋敷境が描かれており、確認調査段階から屋敷境に関連する遺構が検出される可能性が想定されていた。

調査では、調査区中央部で築地塀の基礎の可能性のある石列1をはじめ、屋敷境とみられる柱穴列(2SA1)、柱穴列構築以前に機能･埋没した2SD1をそれぞれ近接する位置で検出した。これらの遺構の主軸は、N21°Eであり、飾磨郡の条里地割と概ね合致する。

これらの遺構の変遷は、2SD1→柱穴列→石列1の順に構築･機能･埋没することは先に述べたとおりである。その中でも2SD1については、2017年に行われた第374次調査でこれとおよそ平行する溝「2-SD02（以下、374次-2SD02という。)」を検出している(姫路市教委2018a)。374次-2SD02は、幅2.2m･深さ0.6mを測る。また遺構の主軸は、N24°Eを指し、飾磨郡の条里方向と概ね一致する。遺構の規模や主軸方向ともに今回検出した2SD1と比較してもさほどの差異はない。また374次-2SD02は、出土遺物から15世紀頃には機能し16世紀代に埋没したと考えられる。上記のことに加えて、今回検出した2SD1と374次-2SD02との距離は、約109mである(図1)。条里制の1坪が約109m四方であることをふまえると2SD1と374次-2SD02は、1坪のうち東西1町分を示しているものと考えられる。

なお2SD1の埋没後にその主軸方向を概ね維持した柱穴列、石列1といった敷地境が設けられたことはすでに述べたとおりであるが、これらは飾磨郡の条里地割の基準方位とされるN21°Eに基づいて北条口周辺の近世城下町地割が行われたとする先行研究を考古学的に裏付ける可能性があり、非常に重要な成果といえる。

また遺構配置をみると、町人地(敷地境以西)には、調査区中央部周辺に井戸が複数基存在する。この井戸を基点にした時､南側には廃棄土坑と考えられる複数の土坑が確認できるのに対し､北側には小規模な土坑やピットのみが検出されている。これらの特徴から間口側に町屋建物が立地し、裏手に廃棄土坑、その間に井戸などの水回りを配置していたという町屋構造が復元され、姫路城城下町における一般的な町屋構造であると評価できる。一方で武家屋敷地側では、廃棄土坑と考えられる遺構が屋敷境付近で確認できたものの井戸の検出には至らず､建物に関連する遺構も確認できなかった。このため武家屋敷地の空間復元を行うことは困難であった。

② 江戸時代以前の遺構

今回の調査において古代の遺構と明確に評価できるものは2SK105のみである。その一方で、江戸時代の遺構埋土もしくはその下層からは古代に比定できる遺物が散見される。さらにこれまでに行われた姫路城城下町跡の調査成果を踏まえると、調査地及びその周辺一帯において古代の遺構は、後世の人為的開発によって撹乱を受けつつも残存している可能性が高いといえる。

引用･参考文献

秋枝　芳1991「姫路城昭和の大修理の成果と展望（Ⅰ）-考古資料の再検討-」『城郭研究室年報』Vol.1 姫路市立城郭研究室

九州近世陶磁学会事務局2000『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会

白神典之1992「堺擂鉢考」『東洋陶磁』第19号　東洋陶磁学会

中川　猛2012「焙烙考 -姫路と周辺の焙烙について-」『山口大学考古学論集』中村友博先生退官記念論文集　中村友博先生退任記念事業会

姫路市1986『姫路市史』第10巻 史料編近世1　姫路市史編纂委員会

姫路市1988『姫路市史』第14巻 別編姫路城　姫路市史編纂委員会

姫路市1996『姫路市史』第11巻上 史料編近世2　姫路市史編纂委員会

姫路市1999『姫路市史』第11巻下 史料編近世3　姫路市史編纂委員会

姫路市教育委員会1984『本町遺跡』

姫路市教育委員会2001『特別史跡姫路城跡Ⅰ -国立姫路病院更新整備に伴う発掘調査報告①-』
姫路市教育委員会2002『特別史跡姫路城跡 -お城本町地区市街地再開発事業に伴う発掘調査概報』
姫路市教育委員会2003『特別史跡姫路城跡Ⅱ -国立姫路病院更新整備に伴う発掘調査報告②-』
姫路市教育委員会2007『特別史跡姫路城跡 -学校法人淳心学院整備事業に伴う発掘調査報告書-』
姫路市教育委員会2016a『姫路城城下町跡 -姫路城跡第328次発掘調査報告-』
姫路市教育委員会2016b『姫路城城下町跡 -姫路城跡第334次発掘調査報告-』
姫路市教育委員会2017a『姫路城城下町跡 -姫路城跡第338次発掘調査報告-』
姫路市教育委員会2017b『姫路城城下町跡 -姫路城跡第343次発掘調査報告-』
姫路市教育委員会2018a『姫路城城下町跡 -姫路城跡第374次発掘調査報告-』
姫路市教育委員会2018b『姫路城城下町跡 -姫路城跡第376次発掘調査報告-』
姫路市教育委員会2019a『姫路城城下町跡 -姫路城跡第399次発掘調査報告-』
姫路市教育委員会2019b『姫路城城下町跡 -姫路城跡第411次発掘調査報告-』
姫路市教育委員会2020『姫路城城下町跡 -姫路城跡第389次発掘調査報告-』
姫路市埋蔵文化財センター 2018『姫路城世界遺産登録25周年記念　白鷺飛翔 -姫路城築城前夜-』
兵庫県教育委員会2007『兵庫県文化財調査報告322 豆富町遺跡Ⅰ』
兵庫県教育委員会2011『兵庫県文化財調査報告403 豆富町遺跡Ⅱ』
兵庫県教育委員会2019『兵庫県文化財調査報告507 豆富町遺跡Ⅲ･駅前町遺跡』
兵庫県立歴史博物館1985『特別史跡姫路城跡 -兵庫県立歴史博物館建築に伴う発掘調査-』(財)兵庫県文化協会
兵庫県立歴史博物館2019『特別展図録「お城ができる前の姫路」』
乗岡　実2002「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡　表町一丁目地区市街地開発ビル建設に伴う発掘調査』岡山市教育委員会
森　恒裕1991「淳心学院出土遺物の検討 -16世紀後半から17世紀初頭における姫路城下町の様相に関する予察-」『城郭研究室年報』Vol.1　姫路市立城郭研究室

図1　2SD1と374次-2SD02の位置

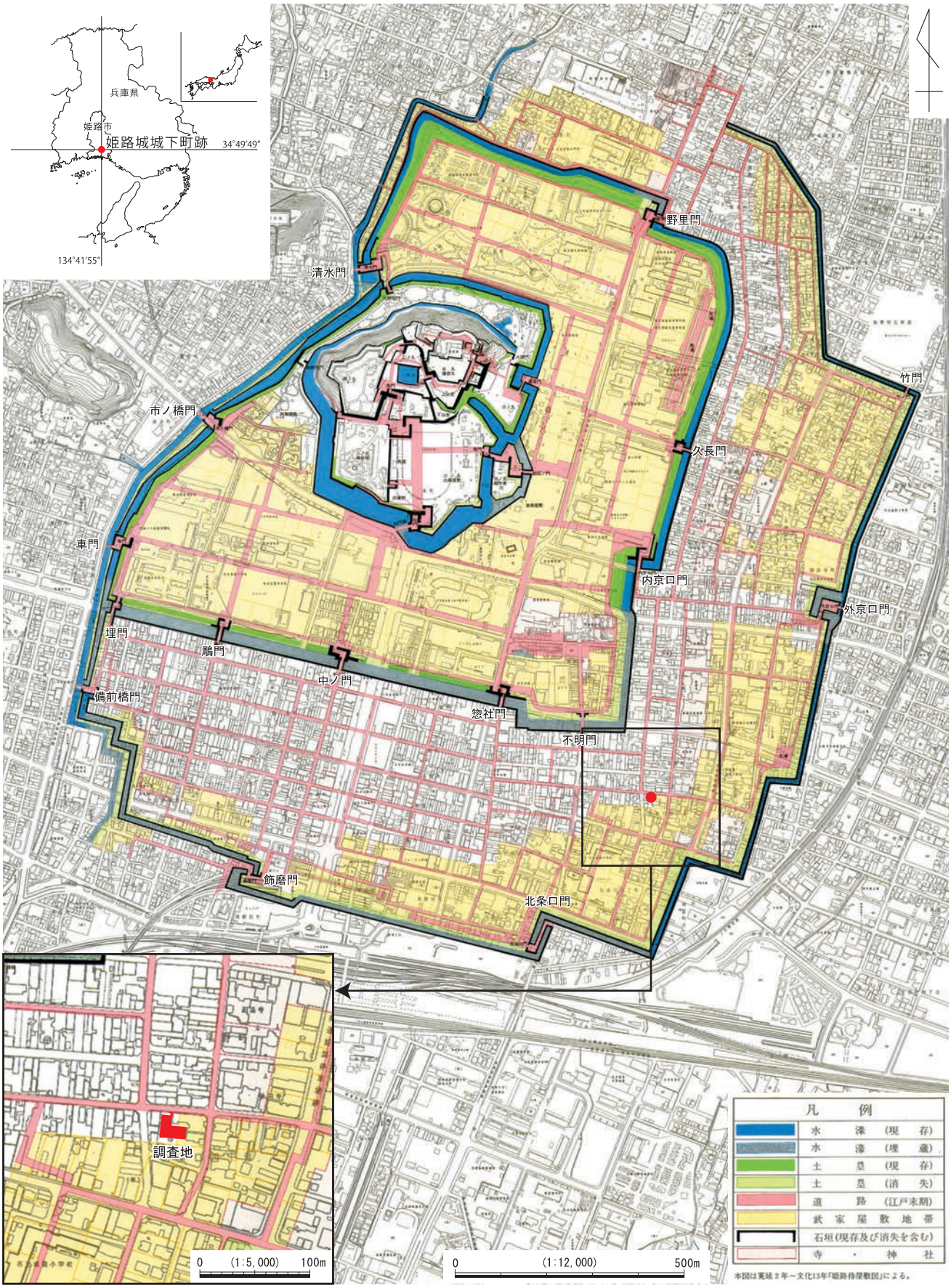


図2　調査地位置図（姫路市2003『姫路城跡（城郭図）』を一部改変・加筆）

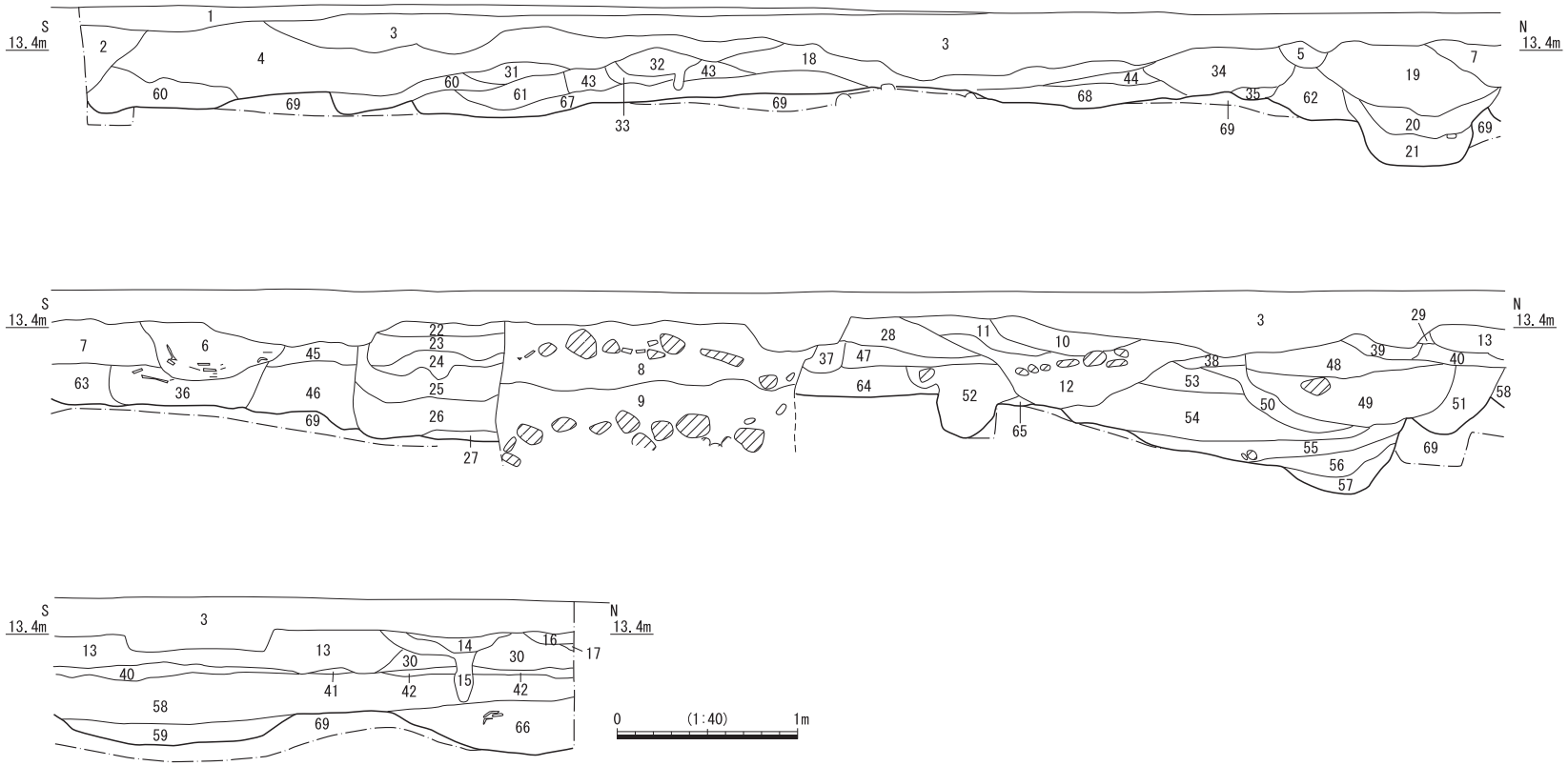


図3　調査区東壁断面図

1. 現代盛土
2. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂
3. 2.5Y3/2 黒褐色極細砂（漆喰、レンガ片含む）（近現代盛土）
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂混じりシルト（炭化物、土器片含む）
5. 2.5Y6/3 にぶい黄色極細砂
6. 10YR4/1 褐灰色細砂混じりシルト（漆喰多量含む）
7. 2.5Y5/2 暗灰色極細砂（土器片含む）
8. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂（砂礫、漆喰含む）
9. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂（砂礫多量含む）
10. 2.5Y4/2 暗灰色細砂
11. 10YR4/1 黄灰色細砂
12. 2.5Y6/2 黄灰色細砂（砂礫多量含む）
13. 2.5Y3/2 黒褐色極細砂混じりシルト
14. 2.5Y5/1 黄灰色細砂
15. 2.5Y7/1 灰白色極細砂
16. 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂
17. 2.5Y7/1 灰白色細砂
18. 2.5Y4/1 黄灰色極細砂混じりシルト（炭化物含む）
19. 2.5Y4/3 オリーブ褐色極細砂
20. 10YR4/4 褐色極細砂（炭含む）
21. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
22. 10YR5/6 黄褐色極細砂
23. 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
24. 2.5Y5/4 黄褐色極細砂
25. 2.5Y5/3 黄褐色細砂
26. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
27. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
28. 2.5Y7/1 灰白色極細砂
29. 2.5Y5/3 暗オリーブ褐色細砂
30. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂
31. 2.5Y6/1 黄灰色極細砂
32. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂（土師器片、炭化物含む）
33. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂（炭化物含む）
34. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂（土師器、炭含む）
35. 2.5Y6/4 にぶい黄橙色極細砂
36. 2.5Y4/2 暗灰黄色細砂（瓦片多量含む）
37. 2.5Y7/4 浅黄色極細砂
38. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
39. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂
40. 2.5Y6/6 明黄褐色極細砂
41. 2.5Y7/1 灰白色極細砂
42. 2.5Y6/8 明黄褐色極細砂混じりシルト
43. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂
44. 2.5Y5/4 黄褐色細砂
45. 2.5Y7/2 灰黄色細砂
46. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂
47. 2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂
48. 2.5Y6/3 オリーブ褐色極細砂
49. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂（円礫、炭、土含む）
50. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
51. 10YR4/4 褐色細砂
52. 2.5Y6/2 灰黄色細砂
53. 2.5Y5/3 黄褐色極細砂
54. 10YR4/2 灰黄褐色極細砂
55. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細砂
56. 10YR4/4 褐色細砂
57. 10YR4/2 灰黄褐色細砂混じりシルト
58. 10YR6/4 にぶい黄橙色細砂
59. 10YR4/2 灰黄褐色細砂
60. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂（炭化物含む）
61. 5Y5/2 灰オリーブ色細砂
62. 2.5Y4/4 オリーブ褐色極細砂混じりシルト
63. 2.5Y5/6 黄褐色極細砂～細砂
64. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
65. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
66. 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂
67. 10YR4/2 灰黄色極細砂混じりシルト（炭化物含む）
68. 10YR3/3 暗褐色極細砂（土師器、炭含む）
69. 10YR5/4 にぶい黄褐色極細砂混じりシルト（地山）

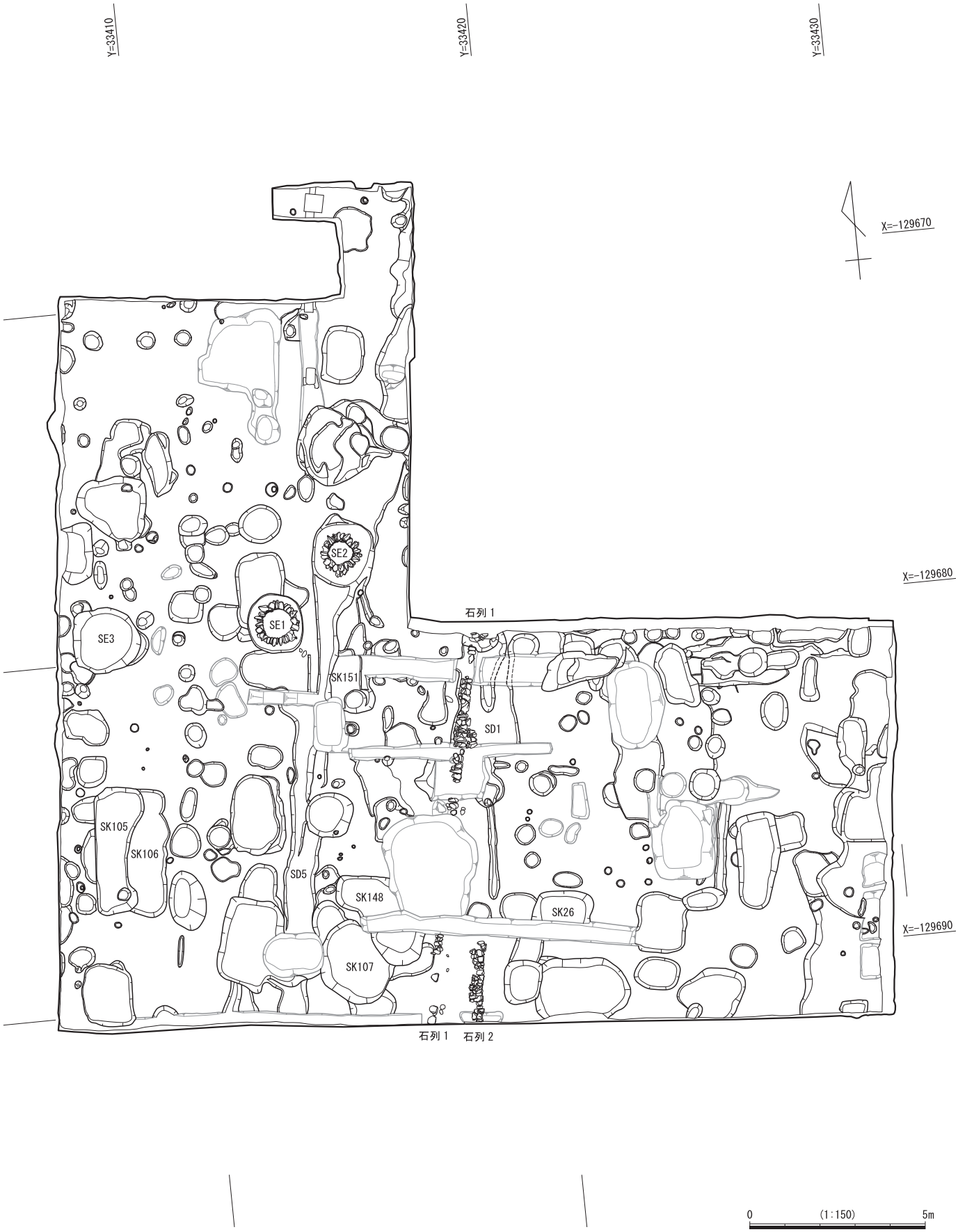
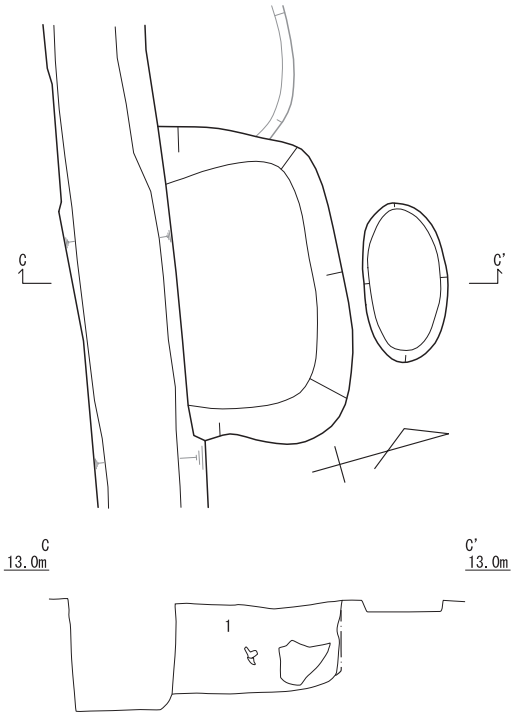

Y=33410
Y=33420
Y=33430
X=-129670
X=-129680
X=-129690
SE1
SE2
SE3
石列1
SK151
SD1
SK105
SK106
SD5
SK148
SK26
SK107
石列1
石列2
0
(1:150)
5m

図4　第1面　平面図

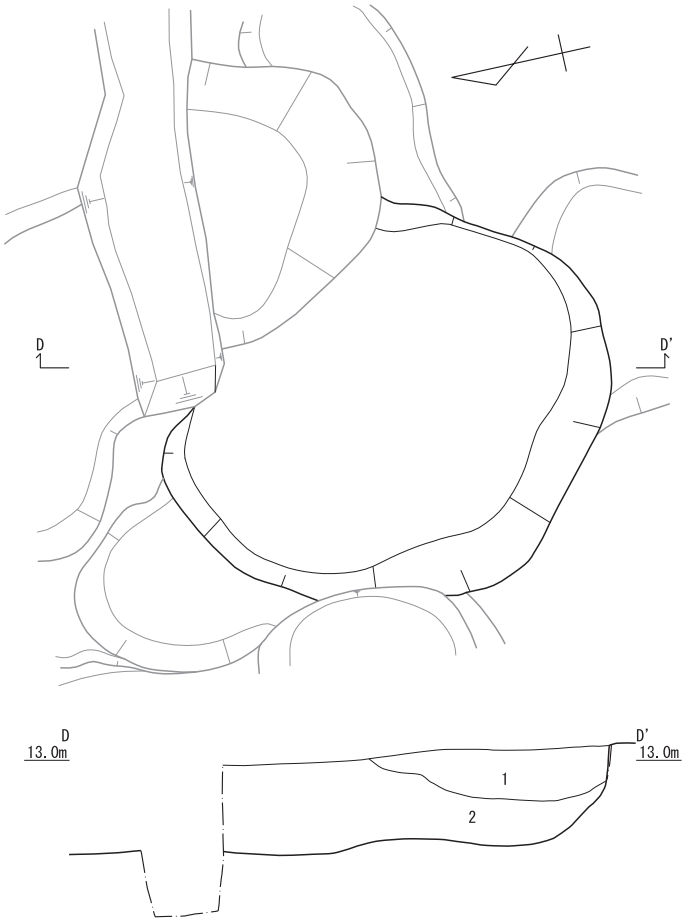
図5　石列1・2　平・立面図

SK26



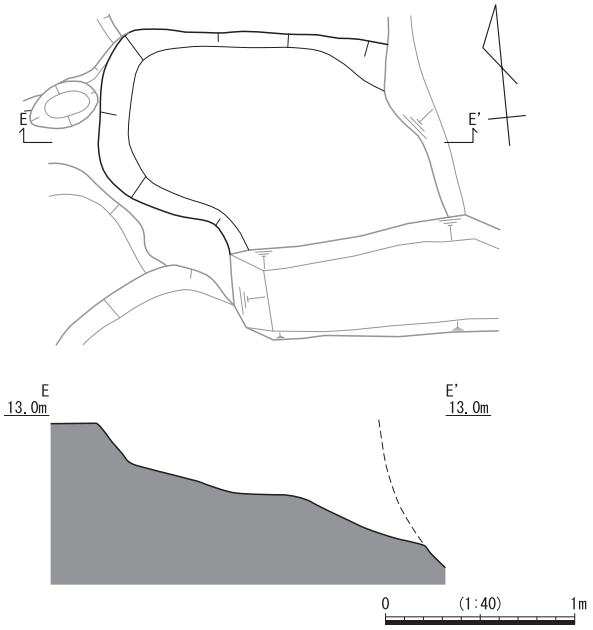
1. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂（陶磁器片多く含む）

SK107



1. 10YR3/2 黒褐色細砂～中砂（瓦片多量、炭化物層状に含む）
2. 10YR4/1 褐灰色細砂（瓦、円礫多量含む）

SK148



SK151

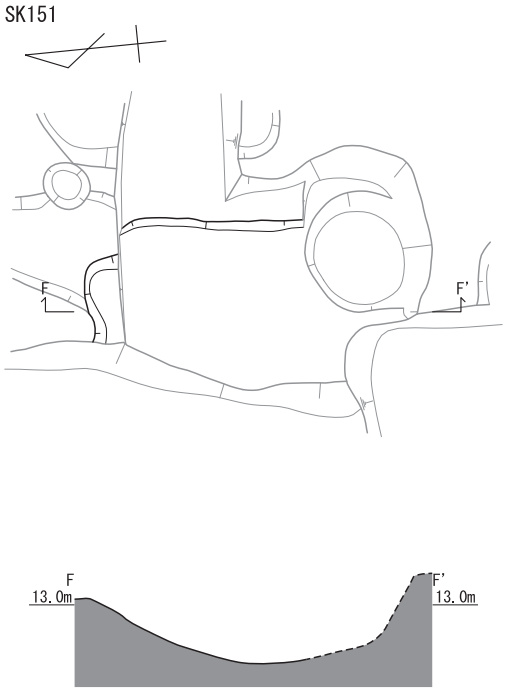


図6　第1面遺構　平・断面図

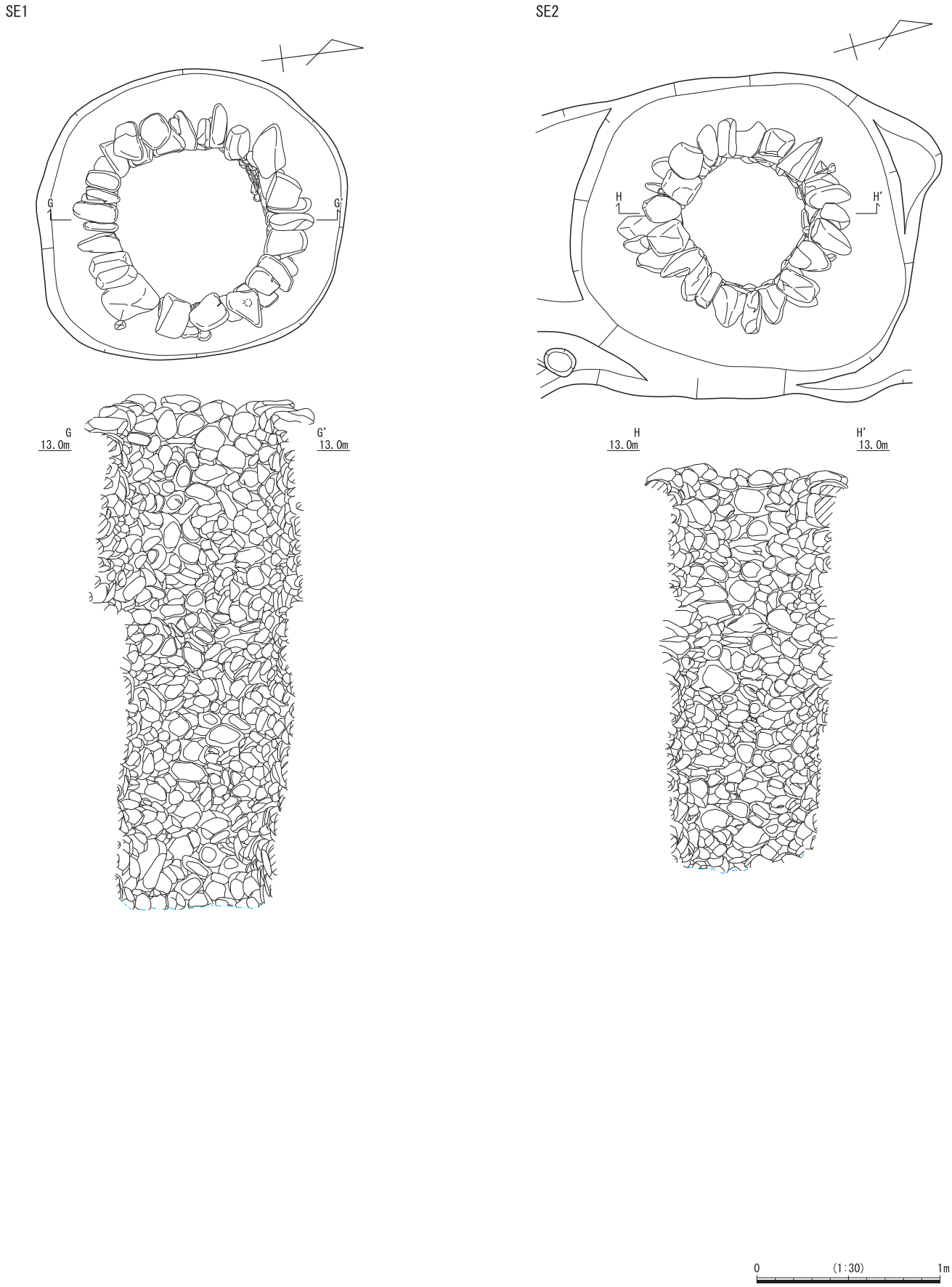


図7　SE1・2　平・立面図

Y=33410
Y=33420
Y=33430
X=-129670
X=-129680
X=-129690
2SK105
2SK27
2SD7
2SA1
2SD3
2SD2
2SK47
2SK49
2SK32
2SK33
2SK50
2SK44
2SK45
2SD4
2SD1
0
(1:150)
5m

図8　第2面　平面図

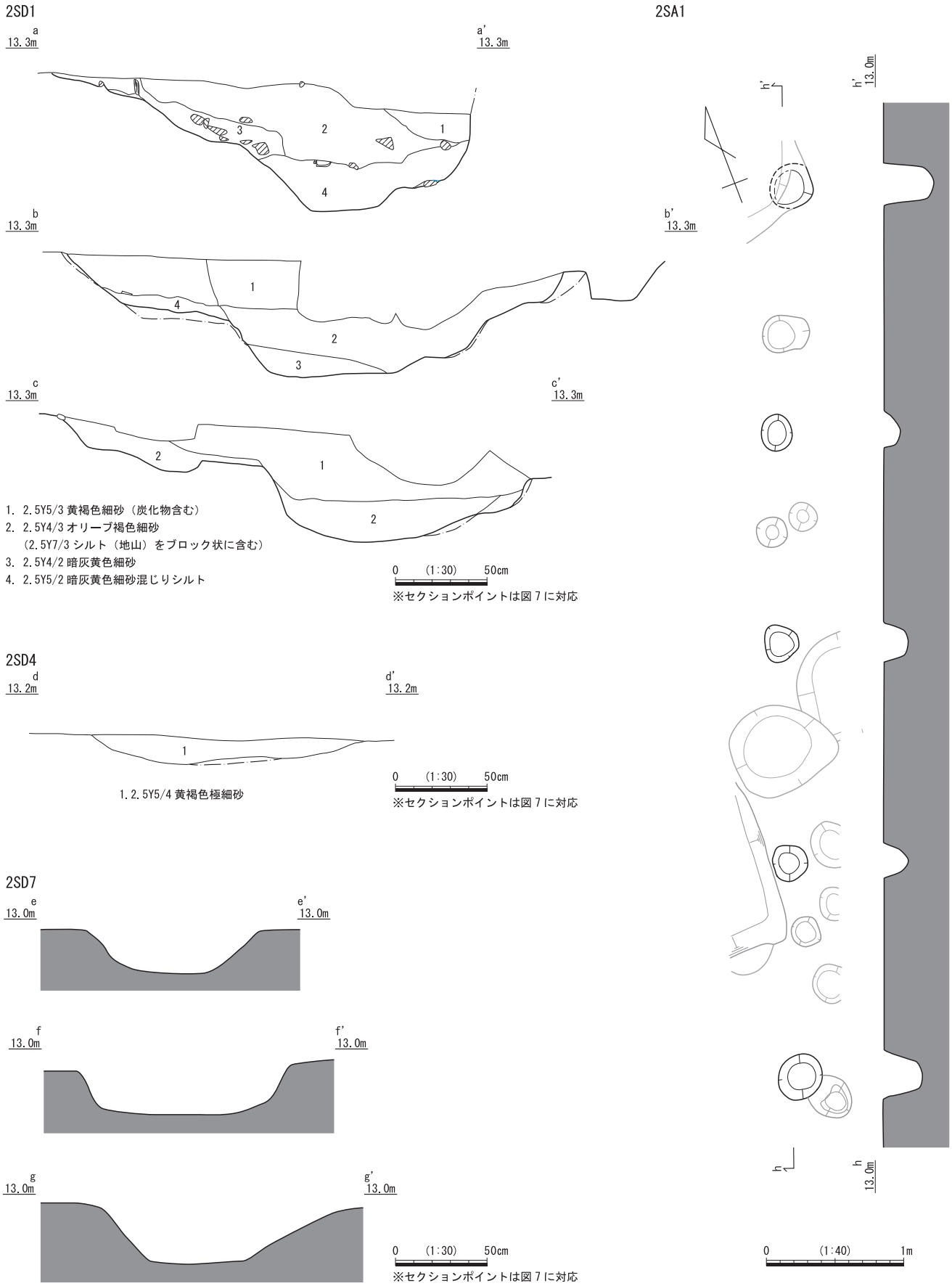


図9　第2面遺構　平・断面図①

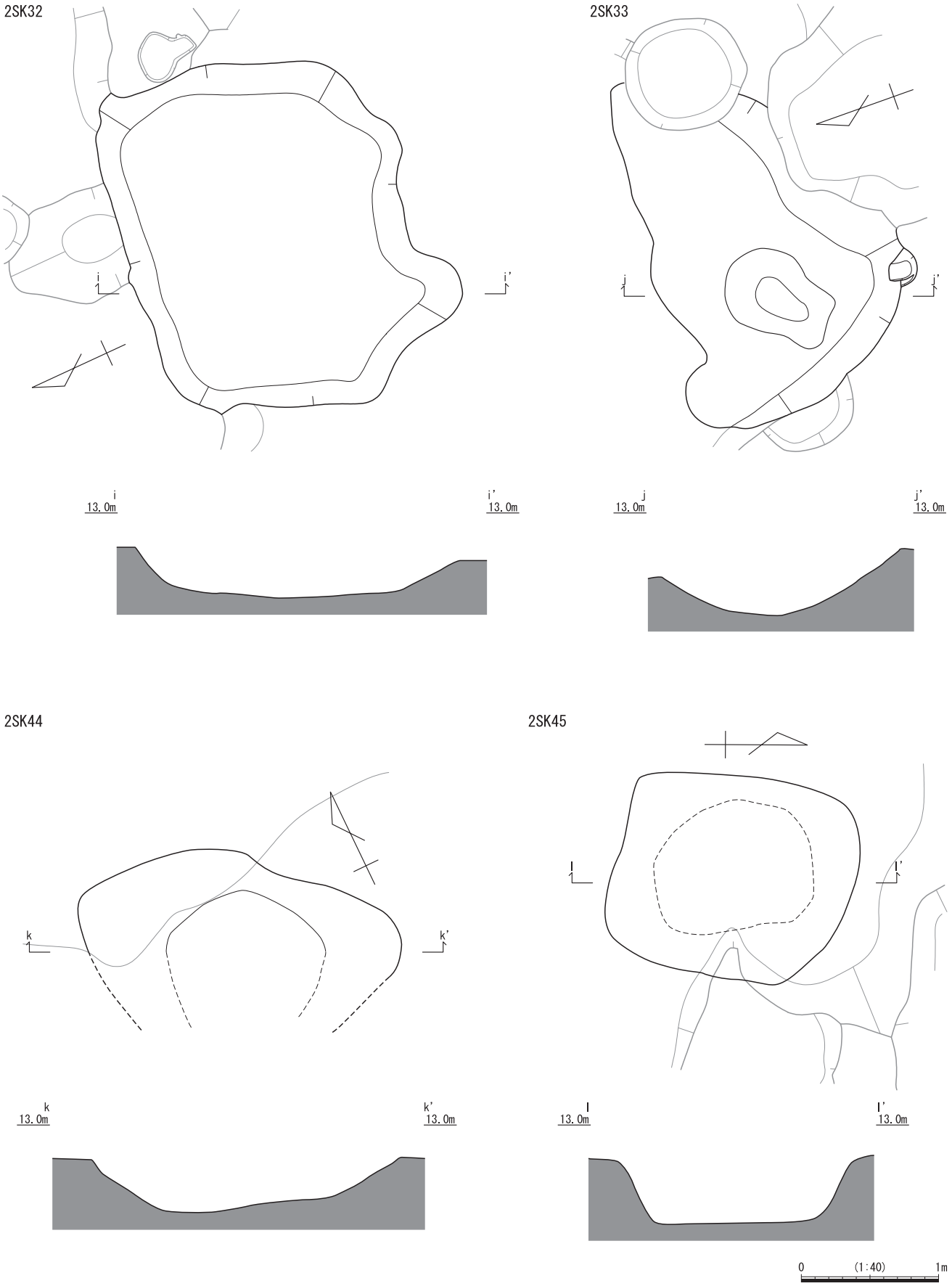


図10　第2面遺構　平・断面図②

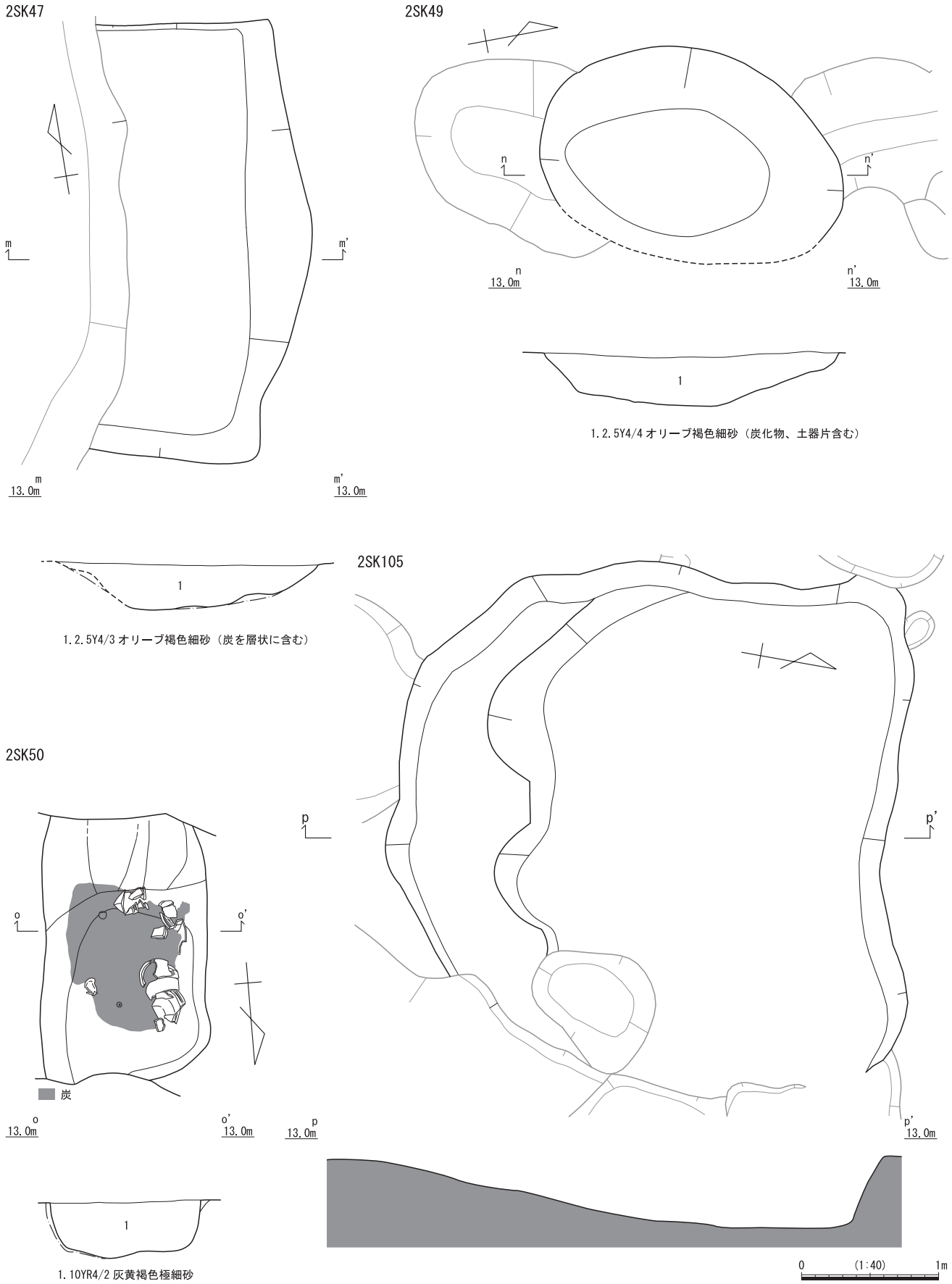


図11　第2面遺構　平・断面図③

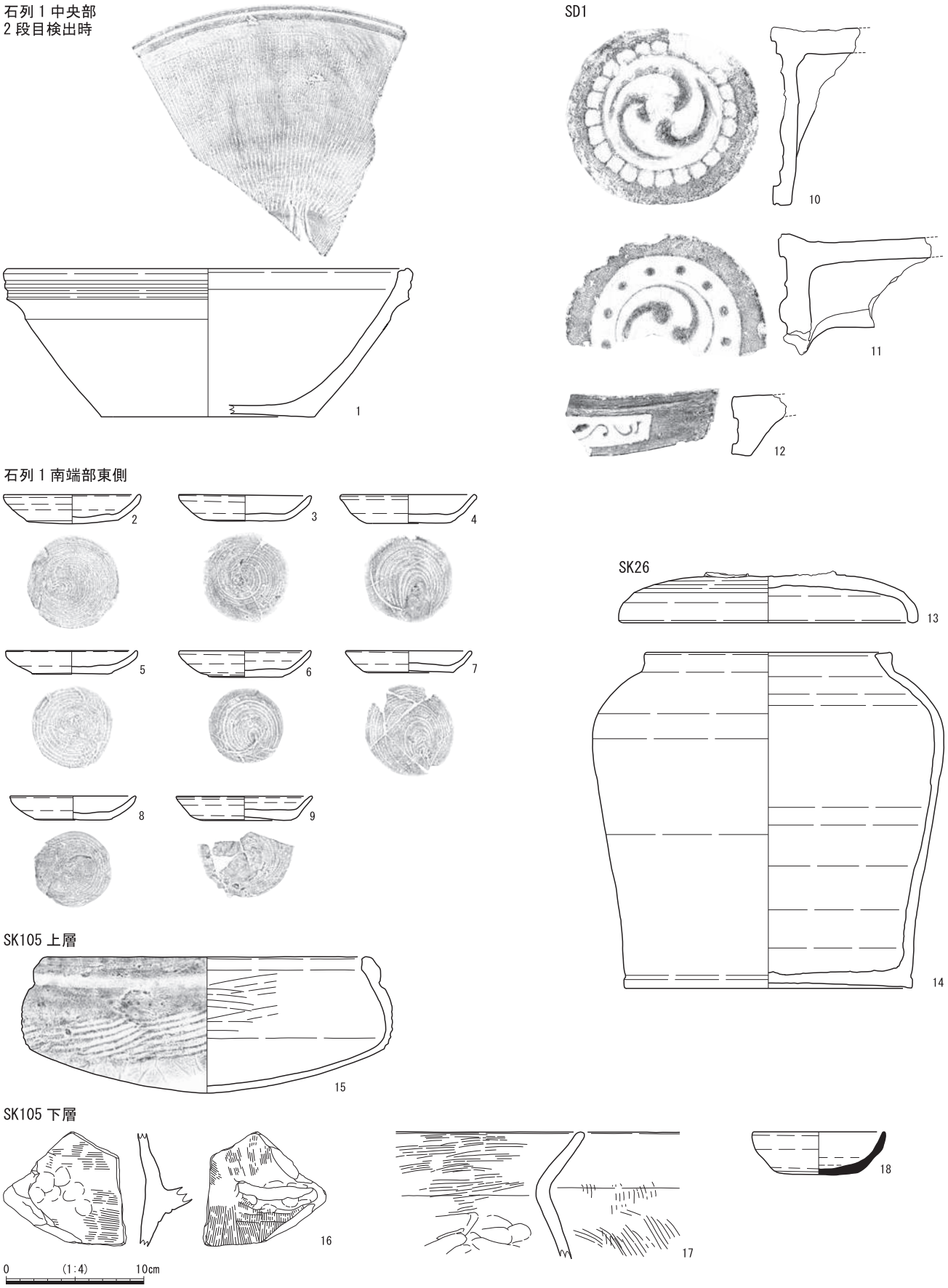

石列１中央部
２段目検出時
1
SD1
10
11
12
石列１南端部東側
2
3
4
5
6
7
8
9
SK26
13
14
SK105 上層
15
SK105 下層
16
17
18
0
(1:4)
10cm

図12　遺物実測図①

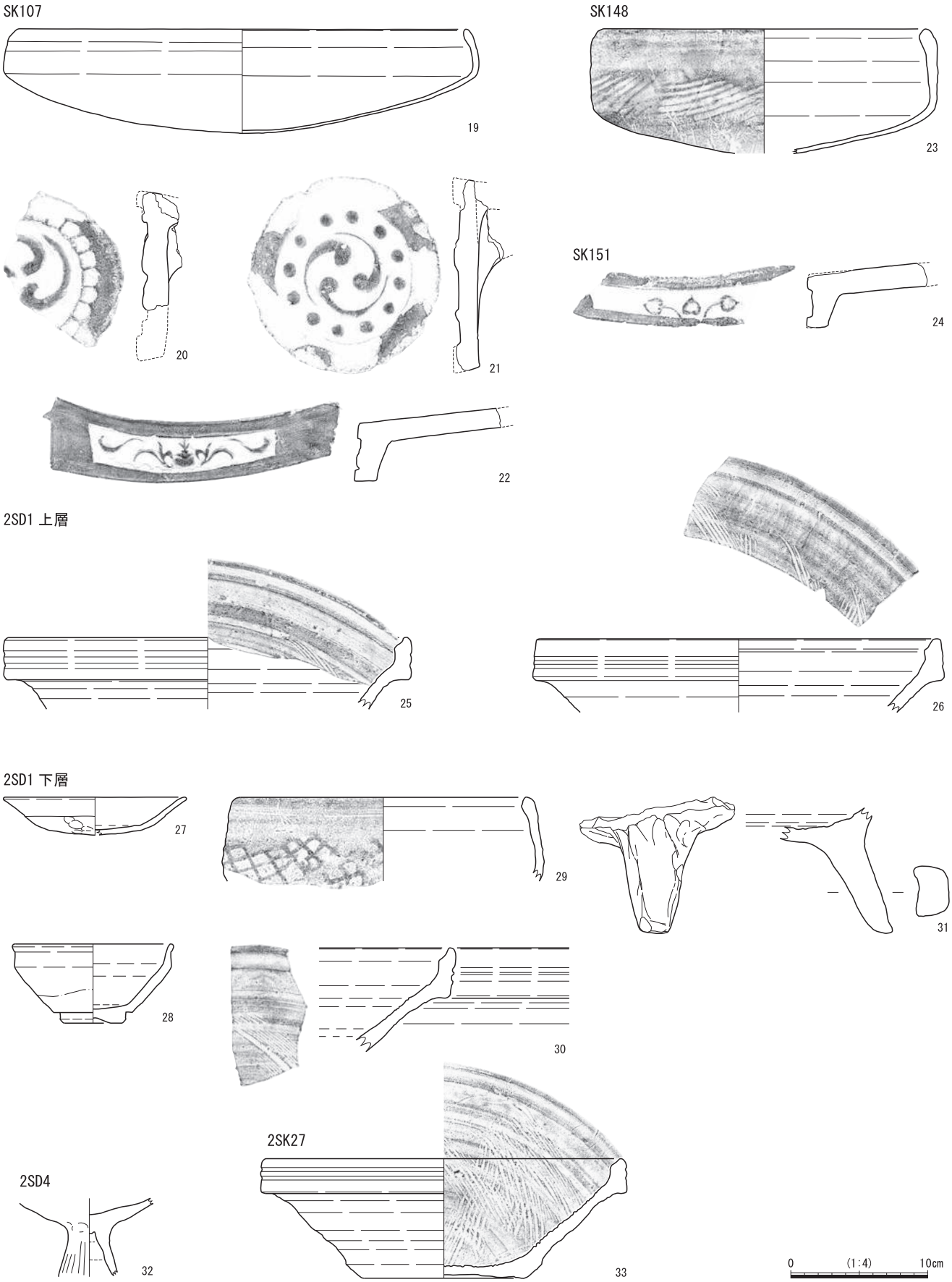

SK107
19
20
21
22
SK148
23
SK151
24
2SD1 上層
25
26
2SD1 下層
27
28
29
30
31
2SK27
33
2SD4
32
0
(1:4)
10cm

図13　遺物実測図②

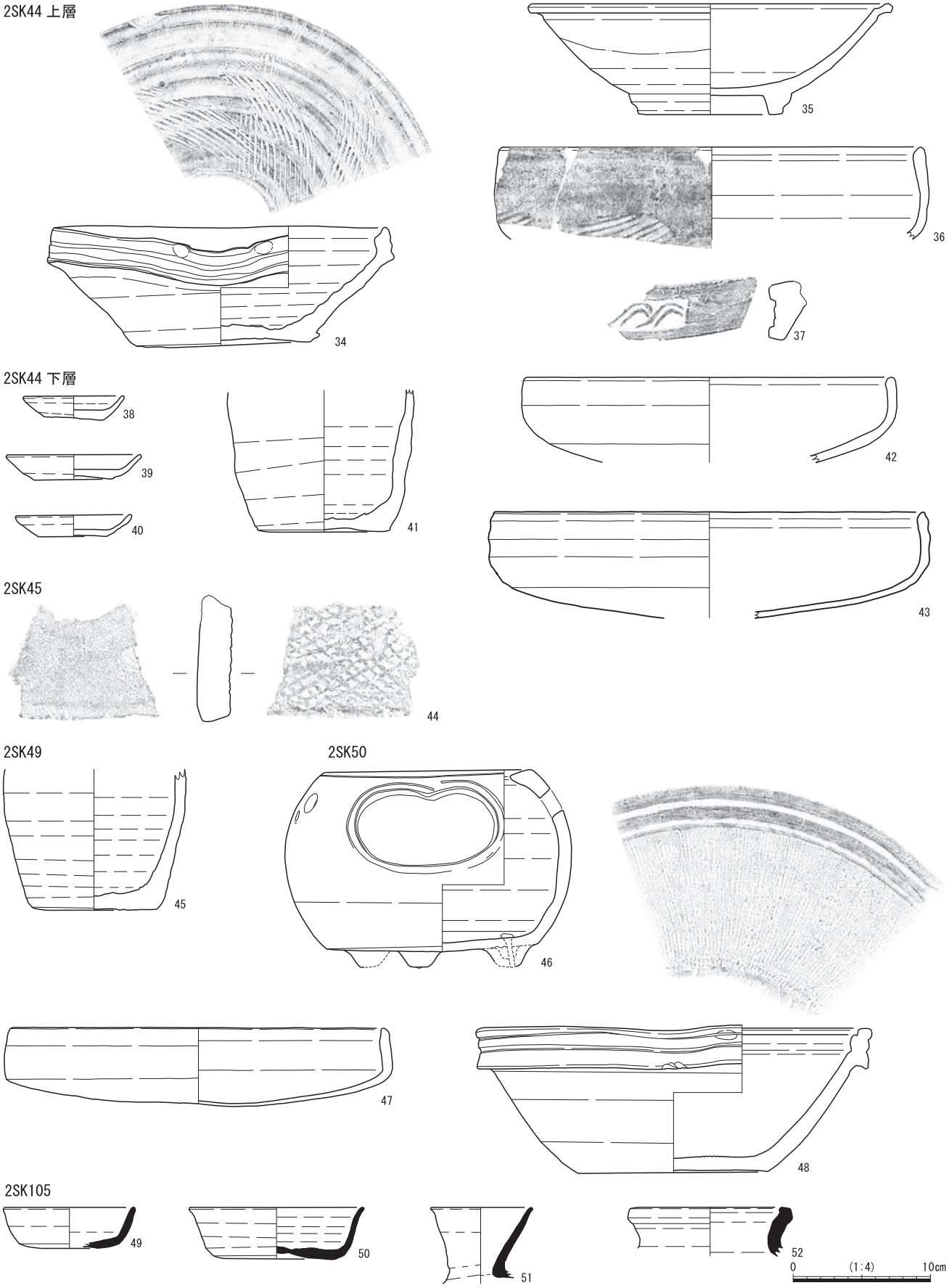

2SK44 上層
34
35
36
37
2SK44 下層
38
39
40
41
42
43
2SK45
44
2SK49
45
2SK50
46
47
48
2SK105
49
50
51
52
0
(1:4)
10cm

図14　遺物実測図③

第１面遠景（南東から）

第 1 面全景（北から）

石列 1 検出状況（南から）

石列 2 検出状況（南から）

写真図版 3

SD5 断面状況（南から）

SK26 断面状況（東から）

SK107 断面状況（西から）

SK151 断面状況（南西から）

第 2 面遠景（南東から）

2SD1 完掘状況（南から）

2SD1 断面状況（南から）

2SD1 断面状況（南から）

2SK50 土器・炭出土状況（西から）

2SK50 土器・炭出土状況詳細（北から）

写真図版 9

10

24

26

2 ～ 9

27

28

50

29

50　底部外面

34

51

報告書抄録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第407次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第96集
編著者名	関　梓・山下大輝
編集機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL（079）252-3950
発行年月日	令和2年（2020年）3月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
姫路城城下町跡（ひめじじょうじょうかまちあと）	兵庫県姫路市（ひょうごけんひめじし）北条口四丁目37（ほうじょうぐちよんちょうめ）	28201	020169	34°49′49″	134°41′55″	2019.1.8～2019.3.26	373㎡	集合住宅建設

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	遺跡調査番号
集落跡	奈良時代 江戸時代	石列、土坑、溝、井戸	土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦	20180376

要約	今回の調査では、武家屋敷地と町人地との敷地境を示す溝・柱穴列・石列をはじめ、土坑や井戸などを検出した。溝は、遺構主軸がN21°Eで、第374次調査で検出した15世紀代に機能したとされる溝と平行関係にある。さらにこれらの溝の間隔は、条里制における１町分に合致する。つまり飾磨郡の条里地割の基準方位であるN21°Eに基づいて北条口周辺における近世城下町の形成がなされたとする先行研究を考古学的見地から実証するものである可能性があり、非常に重要な成果を得ることができた。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告第96集

姫路城城下町跡

－姫路城跡第407次発掘調査報告書－

令和2年（2020年）3月31日発行

編　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
TEL（079）252-3950

発　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地

印刷・製本　内海印刷株式会社
〒670-0808　兵庫県姫路市白国5-4-8